



vol. 87

千葉市美術館

Chiba City Museum of Art

〔編集・発行〕
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
〔発行日〕 2018 年 12 月 26 日
〔印刷〕 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館ニュース「C'n」87 号

特集 1「生誕135年 石井林響展―千葉に出づる風雲児―」
担当学芸員に聞きました
「千葉市ゆかりの日本画家 石井林響の魅力」

特集 2「1968年 激動の時代の芸術」報告

ボランティア日和

**夏のイベント報告
美術館の夏休み**



石井林響《王者の瑞》(部分) 大正7年 千葉市美術館蔵

石井林響《木華開耶姫》明治39年 千葉県立美術館蔵



これからの展覧会のお知らせ

千葉市美術館では、本号で特集する企画展「生誕 135 年 石井林響展 千葉に出づる風雲児」が今年最後の展覧会になります。
なお、石井林響展の会期は年明け1月14日(月・祝)まで、新年 5日(土)開館時には、登渡神社登戸神楽囃子連の獅子舞が皆さまをお迎えします！

3/9からは
第50回千葉市民美術展覧会
＋
房総ゆかりの作家たち
千葉美術会草創期のメンバーをはじめ、千葉の美術界の先人達を紹介。

1/20からは
ブラティスラヴァ世界絵本原画展
BIB で出会う絵本のいま
世界 11 カ国 38 作家のイラストレーションが一堂に！
絵本づくりの舞台裏もお見せします。

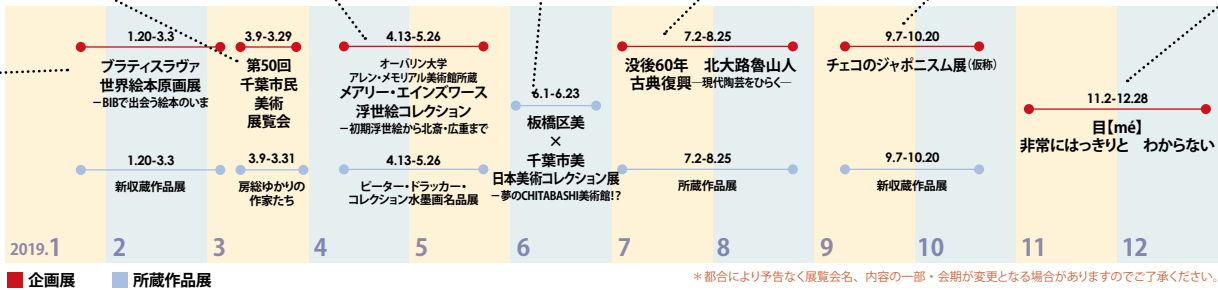
4/13からは
オーバリン大学アレン・メモリアル美術館所蔵
メアリー・エインズワース浮世絵コレクション
―初期浮世絵から北斎・広重まで
明治時代に来日した女性コレクターによる浮世絵コレクション。初めての里帰り展です。

6/1からは
板橋区美×千葉市美
日本美術コレクション展
―夢の CHITABASHI 美術館!?
日本の古美術の楽しさを常に発信し続ける板橋区立美術館との夢のコラボレーション！

7/2からは
没後 60 年 北大路魯山人
古典復興―現代陶芸をひらく―
生来の食に対する関心から「料理の着物」としての作陶に向かった魯山人を中心に、同時代の陶芸家たちの作品や古陶磁もあわせて紹介。

9/7からは
チェコのジャポニスム展(仮称)
チェコにもたらされた日本からの輸出工芸品や日本風に作られたボヘミアン・ガラス、チェコから来日した画家たちの絵画や、日本美術のモチーフを反映した作品など。

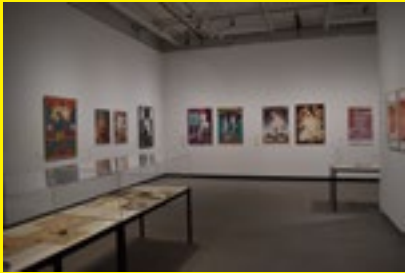
11/2からは
目【mé】
非常にはっきりと
わからない
いま国内外で注目を集める現代芸術活動チーム・目【mé】の、美術館における初個展。



*都合により予告なく展覧会名、内容の一部・会期が変更となる場合がありますのでご了承ください。

1968年 激動の時代の芸術 報告

1968:
Art in the Turbulent
Age



展示の様子



講演会とパフォーマンス「し・心・4ー ガリバー1968を語る」
(講師:シュウゾウ・アツチ・ガリバー(美術家))
パフォーマンス:シュウゾウ・アツチ・ガリバー、荒木悠、Lily Shu)



講演会「1968年前衛の終焉ー美共闘 廃墟からの出発」
(講師:堀浩哉(美術家))



講演会「サイケのHAMANO、サイケとその後の世界を語る」
(講師:浜野安宏(ライフスタイルプロデューサー))



ゴーストクラブ「MUGEN」のライトショー2018(設営作業と内部の様子)



会場で配布された子ども向けセルフガイドとキャラクター

ボランティア日和

私と美術館

千葉市美術館のボランティア活動に参加するようになってから、千葉市美術館を始め、これまで以上に多くの美術館へ出かける機会が増えました。そうした中で、千葉市美術館で開催された「1968年激動の時代の芸術」展(9/19～11/11)は、アートとジャーナリズムがコラボした「こんな美術展が観たかった」という私の願いが叶ったような美術展です。

もちろん、このほかに、私の心に残っ

ている美術展があります。以下2つほどご紹介したいと思います。

まずは、「熊谷守一」展(2017/12/1～2018/3/21、@東京国立近代美術館)です。観ている途中で、例えば《猫》(1965年、愛知県美術館 木村定三コレクション)の作品のように、絵(猫)の周りが全て縁取りされていることに気がきました。後日、専門誌(『芸術新潮』2018年5月号)を見て分かったのですが、これは赤い輪郭線を引き、色面で埋める「守一様式」と呼ばれるもので、この事実を知ったときには、何かすごい発見でもしたかのような気分になりました。

もう一つは、「大々地図展ー古地図と浮世絵」(2018/9/15～2019/1/14、@東京:東洋文庫ミュージアム)です。かねてより、「古地図はアート」と考えていた私は、この美術展(メインは古地図)を見つけ、まさに「我が意を得たり」とばかりに得意満面、ドヤ顔で出かけて行ったことを覚えています。

いずれにしても、美術には、100人いれば100通りの観方、楽しみ方があるのではないかと思います。また明日からも、こうした楽しみを求めて美術館に足を運ぶつもりです。

[美術館ボランティア 岡安賢二]

生誕135年

石井林響展 Ishii Rinkyō:

Leading Nihonga Artist from Chiba, 135 Years since his Birth

千葉に出づる風雲児

11.23(金・祝)
2018 1.14(月・祝)
2019

「千葉市ゆかりの日本画家 石井林響の魅力」

なぜ今、石井林響展なのか？

林響は千葉市に最もゆかりが深い作家です。千葉市生まれ千葉県没で、地域ゆかりの近代の日本画家としては、美術館始まって以来、重視されてきた1人でした。

ただ、県立美術館で約30年前に、他の県内でも以前展覧会がありましたので、市美術館で取り上げるのであれば本格的に、そして何かきっかけが欲しかったです。数年前、林響の孫にあたる方から、初期の作品や身内に伝わる資料をご寄贈いただいたことが、今回の展覧会の実現につながったといえます。最初に資料をご寄贈いただいた時に、それを元に特集展示をしたのですが、地域の美術館で地域に残った資料に基づいて、それを検証して伝えていくことは大事だなと非常に身にしてみえました。個人的には林響の浦上玉堂評価への関心もきっかけですし、面白いと思っていました。

生誕135年ですが、林響は早くに(45歳で)亡くなっているため、没後でいえば88年経ったこととなります。この時間の経過というのは、関係者の記憶や証言という面から、振り返る上で厳しいこともあるのではないのでしょうか。

林響は大活躍中の年齢で突然亡くなったので、本人もやりたかったであろう個展というものも、生前は一度もありませんでした。遺族や弟子がそのつもりで先生の作品を集大成する機会も限られてしまったわけです。

今回、写真資料もたくさん展示されていますね。

多くの追悼文があって、それを読んだり写真を見たりすることで、人柄とか人生をあとづけられるような感じがします。このくらい東京で活躍した人であれば、もっといろいろ資料があったでしょうけれど。今回は、千葉の支援者とか当時つきあいのあった人の方に残された記念の写真などが興

味深く、家族写真とあわせて千葉の様子が分かります。以前、東金の城西国際大学水田美術館で、千葉の支援者たちとの関わりに焦点を当てた展覧会が行われていますが、その時点から亡くなられた方々も多くて。弟子や画家仲間がいろいろ思い出を語ったりしているので、今後もいろいろな線から資料とかもう少しあるだろうと思うのですが。

今回の展覧会には林響のほぼ全貌を盛り込んでいます。若い頃の作品は賞を取って話題になり、当時の雑誌に図版が載っているから、こういうのを描いたということがわかります。現物は見つからないものも多いですが、どういう傾向だったかはそういう資料を拾っていっていけばわかる。いつ何をしたのかも雑誌に載っている情報から1つ1つ拾っていくことができるのです。しかし、次第に画壇と距離をおくようになると動向がみえなくなり、林響が訪ねた先についても、日記や記録が残されているわけではありません。例えば、日本画家秋野不矩との関係についても、先生である林響のことを思い出深く語るのも、その文脈で林響の名前が知られることはあっても、具体的な縁はわかっていませんでした。今回林響が秋野不矩のふさごとで描いた《兎月図》【図1】という新資料を出品できましたが、そういう旅先、訪ね先がもう少しあったと思うんです。旅に出た先で描いた簡単な絵があるようだし、そういう出先でのエピソードなども少しあるはずだけれど、あの年代のかなり活躍した人にしては年譜の空白もあるんです。

林響の千葉愛・地元愛

若いときの使用印【図2】に、千葉の生まれである「みちのくに」が刻まれています。これから中央で活躍しようというときに、その心境はどのようなものだったのでしょうか。

これは明治39年に彫られたというのがわかります。「天風」という字とかいくつかの印文を頼んで彫ってもらったわけですが、その中の1つに「總之

野は吾生地」と。初期の作品にしか見られないのですが、修善寺にも持って行って押しています。《美人雙清(羅浮仙)》【図3】は、千葉の支援者ではなく修善寺の新井旅館に残してきたもので、テーマ的にも特に千葉とは関係は無いですが。そんな若いときに千葉と関係無い人のために描いた作品に押すなんて。故郷の人を喜ばすみたいな事ではないわけです。

林響の地元愛エピソードは、他にもありますか？

東京を離れたかった仲間が船橋に新居を構えたりすると、たいへん喜んだようです。外の人々は千葉に対し、主に海の方だけど、都会から近い南の田舎、大島に行くのと似た感覚で、南の代替地のようなイメージを持ってきた……。

林響は比較的に早くに理想を見つけ、自分の原風景を大事にし、そして千葉に帰ってきました。

歴史画の方で評価されたし、いろいろ描ける腕があったけれど、心の中の原風景をいかに自分らしい表現で描き残していくかというテーマはずっとあったと思われ、それで千葉に帰ってきます。『土筆』(表紙絵原画)【図4】なんかは、たまたま旧制千葉中学校の同級生仲間だけでも、俳句のサークルという雑誌、文学方面の人たちの動きなんですよ。それに賛同して協力するし、また歴史系の房総文化をまとめようという研究会にも発起人みたいなことで参加して、房総の先達、文人画家の文章を寄せるとか、千葉に戻ってからは明らかに積極的にやっています。それが急に始まったわけではなく、東京に居るうちから「郷土礼賛」という感じですね。東京の画会に他に、千葉の人たちが発起して、「総風会」という後援会を立ちあげ、それは本当に千葉県人たちだけで何十人も名を連ねていました。「天風」として東京にいた時代です。郷土を思う人は郷土から好かれるし、相思相愛で、だから林響は特別だったと言えるでしょう。



《旅の南から 仁右衛門島》大正10年 山種美術館蔵 (12/20までの展示)

画房「白閑亭」というユートピア

林響は千葉に戻り、居を定めてこれからというときに亡くなっています。自ら設計して家建てたと聞きましたが、どのようなところだったのでしょうか。

ユートピアみたいなところを作ったようです。建物も庭も作り込んで、素敵どころだったようです。子供が遊べるように古井戸を埋めたりしたそうです。周りは遊歩道ようになっていた。今は何も残っておらず、土地の高低差さえ違うそうです。林響は普請好きだったようで、山村耕花の家とか、林響を慕って隣にきた田岡春徑の家まで設計したらしい。

林響の魅力って何ですか？

まず人としてとても魅力的。絵からも伝わります。絵としては、筆達者ならではのちょっとゆるい、ユーモアがあって表情がいい、色がきれいで、それが好きどころです。その時々に応じて画風を変えていくのですが、その時代の関心ある絵画界の流れを一人で体現しているかのような変遷をみせて、それぞれが巧みで味わいがあるので、そこが面白くていいと思いますね(笑)。これまで、林響の作品の中で別の文脈で出されることが多いのは歴史画なのですが、一方で、《野趣二題 枝間の歌・池中の舞》【図5】のジワジワ効いてくる愛らしさ、いじましき。千葉を思う、自分の居場所を見つけたという喜びを爆発させたような、描きたいものを描くという、そういう喜びに溢れたこの1点ですね。

[話し手: 上席芸員 松尾知子]



【図1】《兎月図》大正9年 浜松市秋野不矩美術館蔵



【図2】 武島合六刻 子母印 明治39年 千葉市美術館蔵



【図3】《羅浮仙》明治40年代初 新井旅館蔵



【図4】『土筆』表紙絵原画 昭和13年 個人蔵



【図5】《野趣二題 枝間の歌・池中の舞》昭和2年 東京国立近代美術館蔵

林響ゆかりの土気からし菜とジャンボにんにくのべヘロンチーノ



ジャンボにんにく、大人の手に乗せてもこんなに大きい!

開催中の「生誕135年 石井林響展」では、展覧会オリジナルメニューを11階レストランがばちゃんいんで提供しています。ランチにオススメなのは、林響ゆかりの千葉市緑区土気と大網白里市の名産品を使った「土気からし菜とジャンボにんにくのべヘロンチーノ」です。

「土気からし菜」は、林響生誕の土地である千葉市土気地区で300年以上前から栽培が続けられている伝統野菜。パスタには漬物が使われており、シャキシャキとした食感が楽しめます。もしかすると若き日の

林響も食べていたかもしれませんね。また、林響が没した大網白里市で、推奨作物として栽培されている「ジャンボにんにく」は、通常のにんにくの3倍ほど(!)の大きさがあり、パスタにもふんだんに使っています。べヘロンチーノを食べるとにおいが心配...という方も多いと思いますが、意外と食べたあとにはにおいは残らないのでランチに食べても安心です。

また、お得なワンドリンクチケットも販売中。観覧料1,200円と通常のワンドリンクが540円のところ、ワンドリンクチケットを使うと、落花生のプチおつまみがついて1,500円に



ワンドリンクチケットではコーヒー・紅茶(ホット/アイス)、グラスビール、グラスワインのいずれかがお選び頂けます。

なります。鑑賞後にコーヒーやワインを飲みながら、林響の作品世界に思いを馳せたり、おしゃべりを楽しんだりはいかがでしょう？

美術館の夏休み

夏休みの美術館では、今年も様々なイベントがおこなわれました。二つの展覧会「木版画の神様 平塚運一展」、所蔵作品展「旅 - ちょっとそこまで、遠くまで」に関連したものもあれば、美術館の仕事を知ってもらうための体験学習や実習も。賑やかだった夏を振り返ってみましょう。



わくわく親子デー
7月30日（月）
小さなお子さんとその保護者のための楽しいプログラムを満載したスペシャルデー。パレンの帽子をかぶった木版画博士と一緒に展示を楽しんだり、「わくわく探検号」を作って会場内を探検したり。工作コーナーでは、展示室と一緒に旅する「旅の仲間」を作りました。



「木版画の神様 平塚運一展」関連企画
美術館ボランティアによる立ち寄りワークショップ
7月28日（土）
恒例の木版画ワークショップ。平塚運一の作品がどのように作られているのか体験した後、展示室に戻ってもう一度作品を鑑賞し直す参加者の姿も見られました。



夏休みスペシャルプログラム 山の日ワークショップ
「行った山／行きたい山／空想の山」
【講師】山下麻衣＋小林直人（現代美術家）
8月7日（日）
開催中の所蔵作品展にゲストとしてご出頂いただいた山にまつわる作品にも触れながらのレクチャーでは、「山の一生」に参加者は皆興味津々でした。イメージをどうやってかたちにするか、子どもたちにとっては馴染みのある粘土工作も今日は少し特別で、自分の考える「山らしさ」にリアリティを持たせるため、講師のアドバイスに道具も駆使して細部まで詰めていきました。できあがった山はつなげて山脈に。7階展示室ロビーに不思議な風景が現れました（会期中公開）。



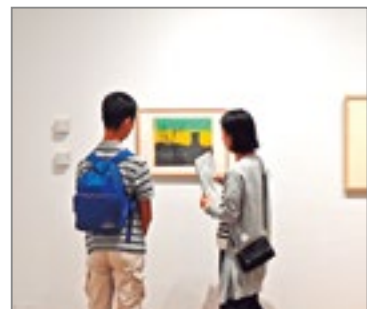
夏休みおしごと感動体験
8月28日（火）
子どもたちに様々な仕事の現場を体験してもらうという千葉市のイベントの一環として、3～5年生の子どもたちがやってきました。挑戦した美術館の仕事はギャラリートーク。開催中の所蔵作品展の中からこれという作品をそれぞれ選び、紹介しました。



美術館で縁日気分
8月19日（日）
毎年恒例となった夏のイベントといえば、これ。地域で大掛かりに開催される「千葉の親子三代夏祭り」にあわせて、美術館でも縁日気分を楽しんでいただきます。近隣の施設や大学、学校、そしてボランティアの皆さんとともに、作り上げたお祭りは、子どもから大人まで思い思いに楽しめるものとなりました。



はてな先生
8月8日他（全7日間）
夏休みには美術館へ行くべくくくるように！そんな宿題だって大丈夫。今年も、美術館ボランティアによる「はてな先生」たちが、鑑賞のヒントと共にお迎えしました。



ギャラリークルーズ
8月23（木）・24日（金）
中学生向けの鑑賞プログラム。いつもは学校団体鑑賞プログラムの案内をつとめる鑑賞リーダー（美術館ボランティア）が参加者の希望を聞きながら鑑賞する作品を決め、展示室を一緒にクルーズしました。



「木版画の神様 平塚運一展」関連企画「小さな木版画の魅力」
【講師】長島充（画家・版画家／日本版画協会会員）
8月26日（日）
版画家の長島充先生を講師に迎え、木口木版画についての実演とお話を伺いました。目の前で動かされる彫刻刀、摺り上がる緻密な画面に、参加者は興味津々でした。手入れの行き届いた道具の美しさにもうっとりしながら、木口木版画の魅力を堪能しました。



学芸員実習
9月4・5・6・11・12・13日
今年は12大学から12人の学生が参加しました。ギャラリートークを体験したり、美術館のリニューアル計画をテーマにディスカッションを行ったりしました。

